

P-335 I期小細胞肺癌に対する手術適応と臨床病期診断の問題点

酒井 光昭¹・石川 成美²・小貫 琢哉¹・伊藤 博道¹
山本 達生²・鬼塚 正孝³・榎原 謙²・野口 雅之³

¹筑波大学附属病院呼吸器外科；²筑波大学臨床医学系外科；³筑波大学基礎医学系病理

【目的】手術の意義があるとされるI期小細胞肺癌（SCLC）における手術適応上の問題点を検討する。

【対象】1977年から1995年に当科で手術が行われた臨床病期I期（c-I期）SCLC15例（c-IA期10例，c-IB期5例）と，c-I期ではなかったが病理病期I期（p-I期）であった2例（全てp-IB期）の計17例。治療は，初期に行われた手術単独4例，手術+術後化学療法13例。

【方法】後向き研究。T及びN因子の正診率，5年生存率をTNM臨床診断と病理診断から比較検討した。

【結果】T因子はc-IA期で正診100%，c-IB期で正診80.0%，過大評価20.0%であったのに対し，N診断はc-IA期で正診70.0%，過小評価30.0%，c-IB期で正診20.0%，過小評価80.0%であった。過小評価されたリンパ節は#11，#12，#13，#5，#7であった。c-I期の5年生存率は60.0%（c-IA期70.0%，c-IB期40.0%）であった。病理病期別ではp-I期90.0%（p-IA期85.7%，p-IB期100%），p-IIA期66.7%，p-IIB期以上は0%であった。

【結論】p-I期SCLCに対する手術を含めた治療成績は良好であった。c-I期T診断とc-IA期N診断の正診率は良好であった。しかしc-IB期のうち80.0%がp-N1,2であり，術前にNOと診断する事に注意が必要であると考えられた。